



へ13 特
門 459
巻 88

消
福
永

重修眞書太閤記九編卷之廿二

池田勝入齋秀吉へ計略と勧る事

并秀吉勝入齋教諭の事

羽柴宰相秀吉郷犬山へ著陣あると其儘諸大名衆
と共に羽黒樂田の邊へ出張あり遠三の陣頭と見
こころ直に陣城を構へんと昔評定ありて土堤を
高く築き堀を深くあり嚴重に備と設く二重堀の
要害に日根野備中守弘就舎弟彌次右衛門尉弘繼
織部高吉彌次郎高述彌四郎高就の勢二千餘人と
籠らる又小松寺の砦より丹羽五郎左衛門尉長秀

同
政
會
印

太閤記九編卷之廿二

八千餘騎と聞の大崎山の要害より稲葉一鉄入道
父子凡四千餘人内窪山の城より蜂屋出羽守頼隆
金森入道五千餘人青塚より森武藏守長一山名丸
衛門大夫豊國亦千餘人と聞但此時の陣觸美濃
近江若狭越前へ万石より五百人山城大和河内摂
津和泉へ四百人播磨美作丹羽丹後へ三百人の定
とうや然の百石より五人つゝ人もあり四人つ
つゝ人もあり三人つゝ人もあるへ是の處の
遠近に依ての定めあり然る時丹羽五郎左衛門
八千餘人と云へ十六万余の軍役と聞は是秀吉卿
の定めあり一處あり是れとの人数山より山谷よ

り峯へ傳ひて陣と張つての焚つていたる篝火の
影幾百千といふ數の限りも知しぬよと見えし
ゆへ尾州勢も氣と吞し今さう此大軍に掛向ふに
如何をよと軍慮も勿々たさやうありは遠參の
勢を頼りし物ゆゑの事ともあゆむれ信雄公
の心中よりゆをんは事と思ひ立始終何とあ
あへささつととあふとさうなげと遠三の軍勢
の氣色とさつと陣とさうつとともその外より越
中の依々内藏助成政より二万余騎よとくを來るよ
一注進ありつるむらうと味方よ加たる大名も
あし遠州三州の軍兵へ甲斐の武田信玄勝頼と味

大月己心編卷十二

方原長篠あとの軍よりとらふと顯くつる度々の
高名戦場の足並心は熟し氣は練つる上あまたの更
に秀吉卿の軍立と恐もをば此方よりともさしつと
引螺を吹陣中の作法いと嚴重に見えたりけり上
方の大名衆も東海道十五ヶ國より第一といつる
濱松の軍勢ふといふととをいふ必定弓箭の名と汚
とへし油断ををせと兎の緒とをしめ上帯とちとも
緩めば氣ととらう弓の絃くひひめしひごろの
くくと見しらとんと心の中より待のうけのつ手合
の合戦と更し間なくあひひけり中あも池田勝入
齋へ羽黒の八幡林より塔の森武藏守長一三州勢

ととらめての手合より追立ちしとあまたの多く討を
しととらふ口惜くつらふもしと此恥辱と雪めり
犬山の上の段より有無の合戦とあひひしも三州
勢の術よりあまたむらとと我身一川の辱のらう上
方武士の弓矢の名折とくひの八千たひ心よりあ
て秀吉卿出張の前より是非の軍とあし敵味方の目と
醒さんとあひひ極めつととも三州勢壘と固くし
出合ぬ詮方あり一日くと過しけるうちより秀吉
卿出張ありつと軍令嚴しとて抜掛をせし戒
め沙汰しつるあつり勝入齋り心よりあつをば三州
勢も上方の軍立と輕々しく侮らねば小牧山岩崎

等の陣々夜廻り嚴重しと夜討とていこと間も
あし篝火の光明うるは忍びと入んたよりも
いと足摺しとくをさけるまが小牧のうこのと打
守り居けるよ遠三の侍大り馳集りけることへ家
家の旗の紋よ掲烏勝入齋急度思案し子息の紀伊
守之助とくめ家老の片桐伊木荒尾あことと呼述
づけて申ける面々も定めて尤あひひつらん小牧山
の陣中よ兵士日毎よ馳加らり勢の初とくめ
り一倍よ見ゆるありさそ旗の紋とみまのあひ
うごくと立あひあひのさう下り藤上り藤打板六
星とて遠三の人々へ悉く打出さりと見ゆるあ

うりくそへ岡崎吉田の城々さあそへ無勢よある
へひとへ此とさ間と幸とて三州よ中入し在々
所々と放火をへし然程あつ小牧山よ來りし三
州勢狼狽をんと疑ひあしとあひあり其方共へ
何とくあひと有けま何もく此日頃三州勢
と鎗付くゆとあつらよあめあひ居たりし處
なり一議も及んば尤然とくいん我々もと
より心付し處あひと同心しけま勝入も大よ
悦ひ面々尤様よあひあつら大将も必定御ゆる
し有へさあり然へ内々人馬の支度をよ入道へ本
陣へ伺ふへしとて四月四日の夜犬山の本陣へ參

上―その由と言上―けまの秀吉郷熟あまと言食
いうよもあろくおのれひ明日急度挨拶申へ
―とてまの勝入とり―あひ然恐ひのものを呼
出―三州の体と聞あふ勝入の申せ―旨は大う
た違へば去あろ濱松よて尤様は手のぬけたる
御さろひ有―とも思れど如何とへことお
ろ―ゆ―煩ひあふ處へ勝入早参―此企今明日の間
たろく―い入道り御本陣へ参上仕る何と言上を
あろく―そと聞出とと皆人のあひ處に敵も味
方も差別あ―此方と間者ありて敵とさうり知ひ
敵ももうあろび恐ひのあるあろ此方のかい敵

も―る遅く後悔臆とろまんその上は篠木拍井
の郷士ら入道は一味と敵地の案内者たる―
と申は村瀬作右衛門尉と郷民の大將と―森川
權右衛門の要害に入置ひ―左それの往還も自
由と得申へ―と申來り此舉とろひ―は事
成就仕るま―と頻て勧め申ける是は篠木拍
井のの共御旨と請て入道とさうり―とあると
知さうりけるあをう―てけし秀吉御仰らまける
濱松のとの大將の國と出るよその備あことい有
あ―は秀吉よても知あ大坂よも京都よも
相應は人數と置て出陣―は小牧よある處の遠

三衆三万の過に遠江國廿八万石三河國三十四万石合せて六十万石余に及ぶ國中の男子堅く三十万人に有べしそのうち三万人を小牧に呼上ても國に残る處廿四五万あるべしなりされば國へ空虛といふべし岡崎吉田田原の城々海近くて運漕のたよりより兵糧の道篠木柏井よりなるよしと秀吉御御ゆるしあがりけしは勝入おし返り龍様御遠慮あそことなること御尤よのいへとも此程牒し合ては中入の計畧延引し及ひゆるち小牧へ漏聞えいそ折角の忠義も無しあり申へくは何とも他の勢と交え入道一手を罷向ひ

申へくは入道たとい討死仕ゆとも悴ありひの家來共も有之いへ御大事よのつらも御先とけ可申いよけ御許いへと推し申へし申けるよしより秀吉卿もとんくさなく藤吉郎といこと一時のあめ入道も勝三郎とてあうく入魂あり交際あることりよのあそめさあやけんまごの勝入憤りて信雄と合体をへ却て難義あるんとやのくしけん然に森武藏守と同く召連あくと仰らるし入道大に悦ひをさる我陣處に引りへ紀伊守より武藏守とも呼寄中入の計畧と御ゆるしありしなり然に何も氣とせめて出張を

大朝己乙編卷廿二

らるへ敵地ありく恐るる事あり兵糧との外能
能支度して篠木拍井より手とや馳付へ事あり
と下知しけし紀伊守以下若きもの事あり
興あることおのひて様々装錦けり秀吉卿の
うよも勝入の思ひ入危あつてしうのうさ
徑て入道との若き時より武邊の世はゆるされ
あひたり中入の事敵地よりの案内者もあつた
更し餘念なくいへとも今の世の人氣は某あつた
若き時とも事うらうい依久間玄蕃り中入を仕損
をへ眼前の事よ能知あつて因て三州路へ
打入あつて近邊の村々と放火して手軽く引上る

ふし必深く入あつた勝お乗あつた敵と輕くと思ひ
ふあ是の秀吉うらうい入道あつて心得あつた
とと態とくく申あり檢使堀久太郎秀政と申
付いよの三好孫七郎と軍と見習ひいへととさ
し遣りいへとあつたうの勝入齋あつて喜ひあつた
上とつても猶豫とくさあつた直に打立三
河路とつて發向と
別本家忠日記に天正十二年四月四日池田勝入
岡崎に中入とんと秀吉に説秀吉三好孫七郎
秀次森武藏守長一堀久太郎秀政とつて三州に
發向とつて三好と森の勝入の壻あり因て堀と

大月己九編卷廿二

さ一添て軍功の證といひと云り五日秀吉樂田に陣ひ六日池田三好森等二万余騎夜半に樂田を發し三州に發向ひ七日篠木の一揆等池田森三好の人々三州を襲ふ由と小牧山に注進ひ八日申刻小牧山に酒井忠次本多忠勝石川數馬松平家忠并信雄の兵を置いて守らむといひて小牧山と御出ありて酉刻小幡の砦に著御井伊万千代先陣たり勝川に至て御鎧とめをらむとい

三好孫七郎秀次三州へ下向の事
并濱松の智計諸將閑道と行事

羽柴宰相秀吉卿に勝入の申請と否とある内變を引出しともやあらんとおやしめしむるまゝり三州へ發向の事と許容ありて森武藏守長一に勝入の壻あり相備よとある軍忠とりては下檢使とて堀久太郎秀政とさ遣はれありと下知ありけし武藏守の大に喜ひ先日羽黒よ追立ちしこと言甲斐ありといふものもありそれらう面と打んよ三州へ發向に比類ある手柄とあるひあるくうびとあひひるまあり一入いさんて出陣と但秀吉卿の事實は危なく其るさしつゝ三好孫七郎秀次と本陣へめこと其

方三州へ發向し池田父子の軍ありと見習ふべし
と仰出され次は田中久兵衛尉とゆへ出され其方
の孫七郎と就て万軍と取賄くをそののなり三州
へ供して軍の首尾とゆへ沙汰とへしりまへて深
入とる事ありと尺手軽く進退とるを以て第一の
忠節と比と教諭とらとる孫七郎今年十七歳ふ
ととも秀吉卿の甥といふを以て一方の大將とあ
されしりとも田中久兵衛尉あこと付ありとて万
の成敗と沙汰とをさしりなりとてまへて秀次の加
勢より遠藤但馬守長谷川藤五郎とさへ加えらる
る由と仰出さる秀次の勢一万余騎森武藏守堀久

太郎遠藤長谷川等と池田の勢と合とて四万余
騎あり勝入齋いよく勇進して發向し先陣は池
田勝入齋子息紀伊守之助同姓丹波守輝重一万五
千餘人二陣は森武藏守長一三千五百餘人三陣は
堀久太郎秀政五千餘人四陣は長谷川藤五郎二千
五百餘人五陣は三好孫七郎秀次一万余騎後陣は
遠藤但馬守三千餘人都合四万余人なり天正十二
年四月六日子刻は樂田と打立翌日七日夜刻は篠
木柏井の郷より陣とる篠木柏井といふ
の樂田の東二里より堀久太郎秀政の思慮あり
とののふとて大将三好秀次の陣より篠木柏

井のめの内通（いんどう）のいへとも人質（ひとしち）もあけいへ
 心元（こころもと）なく存（ぞん）ひあへると當郷（あたいごう）の一揆（いつがい）ともよ本意（ほんい）の上
 へ二万石の地と進退（しんたい）をいへと由高札（たかざ）と立ちよ
 いへと欲深（よくふか）さ郷民（ごうみん）とも眞實味方（まじつまいかた）よ参（まゐ）るへく存（ぞん）ひ
 と勸め申（すすめまをまを）けるよ秀次（ひでつぐ）へとも久（ひさ）太郎（たろう）次第（しだい）と
 被仰（まをたがへ）ひ間久（まひやく）太郎（たろう）自筆（じひつ）よ其由（そのよし）認（ちか）ひて立（た）たりしうの
 案（あん）の如（ごと）く郷民（ごうみん）とも我（われ）もくと陣中（ちんちゆう）へ見舞酒肴（みまひしやく）と送
 りあへとけりるよ因路次（いんろじ）の狼藉（ろうじやく）もつ宿陣（しゆくちん）の都合
 らうしつとけり然（しか）あう郷中（ごうちゆう）よ故老年寄（こらうねんき）ふと
 いふのの元（もと）より三州（さんしゆう）の御仕置（ごしせき）よ服（はく）しつるよふ
 といふの二万石（にまんせき）のたえうりと真（ま）とをば却（かへ）て濱松（はままつ）

の御陣（ごちん）へ何國（なにくに）と攻（せ）ると申（まを）よの知不（ちふ）申（まを）ひへとも二
 三万（さんまん）もあるへと大軍東（だいぐんとう）とこしを馳向（ちきゆう）ひひ御用心（ごうしん）
 ひへくと注進（ちゆうしん）たりけり濱松（はままつ）よそのいへくも注
 進（しん）たりとて其者（そのもの）ともよ黄金錢（おうごんせん）おひたきし取
 をしうの（のち）後（のち）よ二万石（にまんせき）あふへくと云高札（たかざ）より早
 く郷民（ごうみん）とももの心を動（うご）けり池田方（いけだかた）と見へたりし
 のも亦（また）引（ひ）りへと濱松（はままつ）と引（ひ）けるを真（ま）や欲（ほ）よ釣（つ）を
 ぬ人（ひと）をあるさ浮世（うきよ）のさまとしちとさう兎角（うしかく）をさう
 ちよ又（また）三四人（さんににに）走來（そうらい）り上方（かみかた）より池田勝入（いけだかつしる）大将（だいしやう）と
 て四万余人（よんわんよにに）三州（さんしゆう）岡崎（おかざき）へ發向（はつきゆう）をる由（よし）たりしよ告來（つげらい）
 りしうの急（いそ）よ御陣觸（ごちんふ）ありて小幡（せうはた）へ趣（おもむ）きをぬ人（ひと）但

御旗みはたも巻馬印まきうまのしるしもふせいとめのしるし小牧
山こまけのやまと出御いであそあり酒井左衛門尉忠次さけのへい石川伯耆守いしかわ数正かずただ
本多平八郎忠勝ほんたのへい松平主殿助家忠まつだいら御留守居ごりうしゆあり秀
吉ひでよしいづれと働はたらくとも四人心よにんこころを一川いっせんとて本陣ほんじんを守
り決きして出會いであふとありきと定めらる又水野總兵みづの
衛忠重えいしゅう榭原小平太せいはら康政大須賀五郎左衛門尉かむかみ康高かむかみ
本多彦次ほんたのひこ郎康重丹羽勘助氏次等かむかみの五千餘騎ごせんじゆと率
ひそろよ小牧山こまけのやまと出龍泉寺山りゆうせんじの麓ふもとより小幡こぼたと
至いたるへ其路次そのぢよて敵てきと出合いはる何處どこよても
一戰いちせんとてしるしと仰付おほせらる其次つぎよ井伊満千代直い
政まさの先陣せんじんとて奥平九八郎松平又七郎おくへいと前後ぜんごよ

備そなえを旗本衆はたもとしゆの内究竟うちくわうけいの者と左右さうぶよ立成たちなりの刻ときと
くろろ小牧山こまけのやまと進發しんぱつあり二里半にりはんよりりの山道やまぢ
とのまのりて馳かせをある處ところよ忍しのの衆追々しゆしゆと來き
り池田勝入いけだ同紀伊守どうきいの勢共せいども三州路さんしゅうぢへ行いひ定めり
岩崎いわさきありとへ攻せりり可申まこと哉やと注進しゆしんしけは御馬
の上うへよて爰こゝへ勝川かつがわありのそゆくと前後ぜんごとさ
まぬりて刻半ときはんよありんとおぼしき頃ころ勝川かつがわの此方こゝ
お着御あつみあり爰こゝよて暫しばく御勢ごせいと休息きゅうしをとりめあひ丑
の刻ときよへんや御立みたちありて勝川かつがわと涉わたるをある軍ぐんよ
趣おもくよいよき處ところあり鎧よろいと著きへると仰おほせ御旗みはたと
さくを御馬印みうまのしるしと上うへささらし猪越原いのくの辰巳たつみの山やまよ

て御陣列と正さし夜のあくるを待とあふ
別本家忠日記より申刻竊し小牧山と御發向あ
りて酉刻より小幡の砦より著あふと見ゆ長久手合
戦圖と考ふより小牧山と長久手の間五里とい
ひ羽黒樂田へ小牧の西北一里ありといふ羽
黒と樂田とへ三町と隔つとあり篠木柏井へ樂
田より東二里勝川へ篠木柏井の南あり勝川と
御涉小幡との間より龍泉寺山あり此山より小
幡へ十七八丁といひ小幡より長久手へ二里小
牧へ三里といひ小幡より稻葉川と矢野川を涉
り白山より猪越原を越り香駒川と涉り長

久手あり御本陣の山の名と今勝山といふ細う
峯高ヶ峯檜ヶ峯枚ヶ峯富士ヶ峯と東へつゝ
富士ヶ峯充たう戰場へ東西一丁南北二町を
めぐりの地あり
小幡の城中より軍評定ありけるよ待て戦らん
進んで伐んり追付次第に戦らん諸將の評定
よあつくよと一決をさうけるよ岡部彌次郎長盛丹
羽勘助氏次言葉と揃へ敵へ四万余といふ然を六
も七川も分るあらん味方と敵と比つていたと
へのありの九牛の一毛ありされ敵とより過し
不意に起りて半途と討へ敵へ二川より押さうと周

章せん疑ひありとの時粉骨碎身して無二無三
ふ切立るゐとありへ一時勝利と得つへと申
けると本多神原ハ黙然としてそののいそび水野總
兵衛大須賀五郎左衛門のうも然るべくおんえ
ゆ但敵の陣列と聞よ一陣池田二陣ハ森三陣堀後
陣ハ三好とたしうと告るののありさよハ三陣ま
てとやり過し後陣へ切てりうへ味方も勢と
三つに分つへ三好ハいそよ十七歳軍ハ馴と難
と後より易さと先より強さとさびく弱さと討と
ハ兵法の專要ありいそお打立んと勇まれりうと
本多彦次郎廣孝のいそと聞よとよ良策よとゆへ

何とも是よ一決ふへといひつて手勢とて操出り
ハ水野と藤十郎勝成眞先よ進んで馬乗出り今日ハ手柄の
仕うちをとおと大音聲よとて馳けり味方あり
ハ六七段とありも先より敵の容子と伺ひけり
甫庵本よ秀吉卿も犬山より出張し樂田と本陣とて二
重堀より青塚よ至て馬をこの築地をたく築を用心
さひりりけり卯月六日の夜半より池田父子森武藏守
堀久太郎三好孫七郎殿打立己の刻よ篠木柏井両郷尺地も
あまよば陣取よけり二里四方の處あり一揆らりも秀吉
卿より五万石の地を恩賜あるへと昔其沙汰よ及ひり
何事もほそくそ有ける九日三州おめて發向ある

下りの催八日の未明より廻文あり篠木より小牧山に注
進申もの有り重賞あり八日未刻より小幡に向
て旗とあそびさしめものどく急うをあらへ程あり小幡
に付あひ本多豊後守より仰て遠聞の士十人より龍泉寺
表へ出し南とさし勢あり告らせよと戌の刻に出
たあふ勝入へくとも知む亥刻より勢と押行し遠聞の
もの立帰り多勢南とさしと押し由と注進は濱松
と信雄公と丑刻に立ちあひ猪腰原の辰巳の山に著陣
夜のあくるを待あふと見ゆ

重修真書太閤記九編卷之二拾二終

重修真書太閤記九編卷之廿三

池田勝入岩崎城と乗取る事

并群鳥陣前よ吉山と告る事

天正十二年四月九日早天よ池田勝入子息紀伊守
之助古新輝政池田丹後守尾張國岩崎の城を十重
廿重より圍んで責立る城主丹羽勘助氏次ハ濱
松の御供しと小幡よりあり城より氏次第次郎三郎
氏重生年十六歳あると大将とて相傳の侍とも
五百人より籠りける少しも恐むと鯨波と合を
持口とめて防戦し抑氏次り家系と尋ねる

よ清和院源氏足利の一族武藏國葛飾郡田宮莊幸
手の領主宮内卿律師公深の後あり公深後よ參河
國ようつり吉良西條一色と領しけるよあり一色
阿闍梨とも稱と公深の長男一色太郎頼行二男二郎
範氏といふ範氏よ三男あり右馬頭範光左京大夫
直氏左馬助範氏といふ直氏の曾孫氏明尾州丹羽
郡丹羽庄よ住し丹羽平三郎と云是丹羽氏の祖ふ
り氏明の子と二郎左衛門尉氏時といふその子傳
々氏盛その子勘六氏範その子泉守氏從愛智郡
折戸吹上の城主たりその子新々氏負その子左
衛門氏興その子若狹守氏清天文七年岩崎の城と

築てこのとよ移り住その子右近大夫氏識その子右
近大夫氏勝その子勘六氏次あり氏重幼弱ふとと
も兄の差圖よよりて當城を預る敵大勢ありとて
何うの恐ろしく何とて心と一川ふして追散せよ
ゆと勇氣たのまひ見えよなり池田り先陣伊木清
兵衛尉二千餘騎二陣ハ片桐半右衛門二千餘騎岩
崎へ着とひとしく取巻平攻よ攻りくり大手の木
戸と無二無三よ打破らんとゆと合たり城中よと
ハ命の義よまつて輕し名ハ万代よ朽とと聞た
う二度死したると互よのさめ勇めりし弓鉄炮
ととひひしく射出し打出し堀下へよを付しと少し

もゆるめび氣とていひまうと防さける勝入并丹後
守ハ城の左右に立ちしとて諸勢を下知しく在ける
う両将大音聲に城中ハ小勢あるとてこのめや掛と
と采配をふり立ちめくもくと下知しけるよあり池
田う手の者堀に熊手を打ちけ是非に引崩さんと
ひしめくと城中よてハ大木大石と投りけ矢玉と
おしよる今日と限りと働くらると池田勢勇あり
とつへとも大手の小坂とのり得て徒よ百四十
餘人討きたり勝入齋あまを見と云甲斐あま味方
の奴原うみ絶の小城に時刻と移ると臆病風の起
りたるう誰うあるあの堀引破とて下知しけるハ

嫡子紀伊守之助承りぬと呼らりてて真先よ
乗出我に續けぬの共と鎧と引さけ大手の木
戸の外ある逆茂木引かありけると見て城中より
兩の如く射箭と袖よらる異國の樊噲もり
ゆとあの人をりり振舞い誰うハ一人後るへさ
甲の鞆とてさげ鎧の袖とゆりりさ一楯と突並
へ曳々聲とあし攻付たり城中の兵士も天晴よ
く防さしうとも入替るへさ勢もあけまの寄手終
り堀下し付と見て大将次郎三郎氏重馳まらる鎧
長刀と以て突あし一扣らあしけまとも寄手の
大勢ありとて門の脇の堀とのり越込入しうハ次

即三郎氏重生年十六歳白糸の鎧と天衝の前立
たる兜の緒と一匹馬と黒鞍とと大手の城戸
ととらと開と通とぬ一族若黨百七十餘騎前後左
右またと突て出と池田勢とと小勢と
あるまるとあひひうの左右へつと引分と中
と明とと通とける丹羽二郎三郎のあひ切つる
とあると突あやしく廻るとと十五六騎と
突落し薄手も負と猶も手繁く攻しうの池田う勢
少し白けて見えたりけり相従ふのの共も今日と
限りと擧動の敵も持あましく多く討との手と負ぬ
ことと池田の目とあましく大勢ありうの城の大

將と見てけし追とりあましく漏さしと攻立る池田
う家人と片桐半右衛門尉次郎三郎と目よりけり
これ勇士や大將軍と見えはると定め丹羽う子
う兄弟うあましく武士とあましくとも軍の習ひを
是非もあしと獨言しと掛向ひあましく見と八十六七
の若武者あり此人一人討たりともあましくとも軍の
勝もとバ勝へとも軍の負ともあましく打捨て落さ
やと思ひうへと突掛し鎗と引へ次郎三郎大音あ
けりうと寄手と加らうり合と鎗と引と
と一我と落るとの事ありと申条あ
とと清和院源氏の後胤と丹羽右近大夫氏勝の次

男次郎三郎氏重兄勘次の差圖りよりて當城を預
りていつてり逃ん勝負あはれと呼ばりて駈たのこ
の片桐もをんりてあぐ取て返し又鎧を合をける
り次郎三郎の弱年あはれとも身りまぐ早片桐の
壯年よりて名譽の鎧とせし許さし侍あり上段
下段と身りて入ん入しと戦ひり次郎三郎
の突鎧と請損し肩先深く手と負ありり鎧取直
掛ると見しは次郎三郎り小腕はあうとりり付
終り突ふを首と取丹羽り郎従らるり見付主討
と上へ誰り為し命とてりあんのこ若殿の御
供をんとあめいつてめくる池田り勢へ此時城中み

亂し入しり丹羽り手の者城よりへること得と
次郎三郎り乳母り同次郎助氏盛とつり大力の
剛の者寄手多く此人のため討とりり池田り
手ののの次郎助と目りり我打取んと込めり
と次郎助急度見てとてりあはれ人々の舉動り一人の
敵と大勢りて討とりり法あり我等り太刀風と
手本り仕あへゆと呼らりり真向ありり袈裟掛
横車胴切四尺二寸の太刀と以て飛入りり手の下
り十一人り切て捨てり牧野新九郎土肥七郎右衛
門左右り鎧と取て進み近りり丹羽次郎助り
とと笑ひ大儀ありりけりとも冥途の道連頼り入

といふまで二人大に怒り過言あり丹羽次郎助を
みと引あつと鎧を入とい次郎助り鎧をさうひのけ
土肥り鎧と切折あする刀は土肥り兜の鉢とあつて
たりと打うことありう土肥刀を以て次郎助り肩
先を突貫さなりことともひるまひ倒れありう土
肥り肩と三寸をりり切うげさるを土肥こもを
以終り次郎助と討てけり次郎三郎次郎助うこと
し後へ城中は防く兵もありうらうの池田り勢入
かろりて岩崎の城を守りところめよと喜ひけ
る勝入空ハ岩崎城を攻あつと此日頃の鬱氣を散
し討取処の首とも實檢し押付此勢をぬうさば三

州へ切入と沙汰しつ諸軍は凱歌をわけさ
せ意氣揚々とて休息し居たる処へ二陣の森武
藏守三陣の堀久太郎大将三好孫七郎その外長谷
川藤五郎とらめ先陣の勝軍と祝し旗あつたて
参州と切取んといはる手の内ありと勇ましく見
えよける中も池田丹後守ハ古新輝政の後見し
て傍り床机と立四方と見渡し小幡のうことうち
長目居たりける處といつこともなく鳶鳥とい來
り勝入の旗武藏守の旗は翼と休めその外池田勢
のさうと小旗の上は棲り鳴聲うまひとて聞
えしうとも大将と始諸物頭諸侍のつとも心よめ

くるものも無りける。丹後守輝重是と見て多くの鳥や鳶の人と恐とど立去んともをば鳴聲を忌ら。抑鳥の陽中の陰より旗と止り人と怖とにこれ必ののこことあるへ。陰といへ。後陣が後陣は何そあるへ。兆あるんと心と配り目もをさど居たりける處。今ま多く棲止たる鳥も鳶も一聲さげんと四方へものと飛去たり。丹後守いよ怪しとあひひら。只後陣の方とのこ打守り居ける。三好殿の陣もて。先陣の勝軍も心とゆるし。上帯とこ馬の腹帯ゆるめ。心静と割子と開と何氣あくおと。ける体と三列方の物見とも

とくと見瀟し注進しけ。水野本多榊原あこと聞。をの時なりと旗の手ある。六手の面々。わ三手。押出した。岡部長盛八百餘人。丹羽氏次五百餘人。丸とをへ。本多康重五百餘人。榊原康政千二百餘人。右とをへ。大須賀五郎。左衛門康高。千五百餘人。水野忠重父子千五百餘人。中軍あり。敵とわ三段。をりり。押つめし。時三好殿の先手。稲富喜内といへる。鉄炮の上手ありける。あ。敵ハ十分。軍と持し。を用心あこと馬とのり。廻し呼られとも敵。既と五七間の処へ。押つめ。三好孫七郎秀次。小幡原敗走の事。

大陪記九編卷七十三

足輕鉄炮
三勢隊

大陰言九續卷七三

七

并堀久太郎軍配の事

この時大将秀次の鉄炮頭村善右衛門岡本彦三郎
へ手とゆく我手の足輕は下知して鉄炮を打うけ
防さうとも三列勢の烈しき大浪の打うけ
如く山下風のよつよ似て三方より短兵急は揉
まはさしこの村岡本も狼狽しつゝ日頃練習
を三好勢隊伍とて整へて七屬八斷とあり
けしはとて孫七郎の旗本とて總崩と崩と立
上と下へとさささしうの此陣たらしは敗らる
つくと見へはなう中も先鋒と頼まれ田中久
兵衛尉いづ臆たりけん士卒といさめつゝ

野本

あも檢使のさし圖と請くのちといひつゝ堀久太
郎の備の前へ来て申ける様只今孫七郎榊原小平
太丹羽勘次と攻付らば軍あり難義といひ
も果ぬ久太郎大の眼といふらし使も使ふあを
もれ其方の組頭あり千五百余人預るのありそ
えらの進退とさるのう使とて往還とへ道
理ありたし逃て來たるのなるへ將輕げは
士侮るといへつたしあへといはれ久兵衛
赤面し元のち引歸を長谷川藤五郎おれとみ
てさしなう田中久擧動うか我も秀吉御の御眼う
祓うと三好殿とたをげといはれぬのぞう

大陰言九續卷七三

秀次の幼年のころあいろも見ころるべ此一陣の我等陣ありと暗とまりて切たて突たてののののの見えたり村と岡本へ一処に寄合てのをさげるものと三列勢もあはれ多く命と落しけり大須賀五郎左衛門尉康高らるる長谷川と見付いり長谷川藤五郎とあはれと聲とけり鎗と合と長谷川も大須賀と見知り莞尔と笑て突りける双方得たる佐分り鎗の穂先長く五六十合と及へとも勝負見え派上となり下とまり戦ふ處へ水野總兵衛忠重父子一千餘人朝のころ如くとのとおめいて討りける長谷川あは

と見て此大勢を取めらば天死せんも口惜とおのひしうの引とつて退たりけり後三好勢立あはれも敗走し十方へ散亂しける水野う嫡子藤十郎勝成真先と進りて見苦敷上方勢のあるまひや日頃いたげく口とも聞つる今日の有様ささか臆病神と付とさう返し合とて三列武士のころ存とためをとこちめなり追りけて切あろり突あをりると三好う手のもの多く勝成と滅らして二陣三陣もて敗れつる今へころ大將の旗本もて亂立秀次も鎗と取て馬み打のり駈出んとすあはれ處へ後見の為とて

さし副らば遠藤但馬守羽黒の八幡をわきまを
めろく打負たる無念をも今日晴さんと思ひつる
処あり何うの少もためらふと粥川兵藤と先よ
たて鯨波をおひて駈むうひ三列勢をたたく一め
ふ揉破んとひしめくと榊原小平太をこりも騷り
ば美濃侍の口こりり武くいあま退早くと恥
しめて打てめくる遠藤も榊原と見てげまの一足
も引ると手勢をこめく突合切合火花をちりり
て戦ひこり大須賀五郎左衛門へ長谷川を打めり
し口惜くれたのふ処へ郡上の遠藤羽黒の軍よ出逢
し旗さしめの互よ知つる上あまの横合より突て

めくる遠藤但馬守心をこりりハ猛げと大須賀榊
原よ切たてらば今いりみると見えしうの秀次も
此陣ありめくめあめいん馬よ打のり
三四町をりりも引退く大将おとしよさぬの士卒
みされて散々よいつくとも落失たり水野父子岡
部彌次郎をこりり本陣よ切入孫七郎を討へ
と心掛しうとも氣早と秀次本陣よ見えこりり
みより何方へう落つるど大将のこりりあま御舉動
やとのりりあうり射つ箭よ秀次馬を射さる
うの下立歩行よと逃ると三列勢追うけ羽柴秀吉
の名代たるのりり怯くも後と見ると口々小言

らど無念とあおのひけん秀次の傳りて三好の家
の宿老白井備後守取てくし掛るも引も軍の骨法
ありそとと知ぬ田舎武士よの教えんと鎗と取
直し真先と進こし水野う即後と三四人つと倒し
猶も進むと藤十郎勝成よと敵ぞ我を捕と捕てく
とんと云あうう鎗と合を白井う運やあううけ
ん木の根と躓と轉ひけると藤十郎とうさび馳
と一鎗と突伏あうへて首と取村善右衛門の岡部
長盛と渡り合面もあうう切合けると長盛う為
切あをらる水野う手うも本間十左衛門都築忠
兵衛米津梅子之助あうと手繁く突立けしは岡本彦

三郎木下左衛門稻富喜内とくしめ究竟ののの共
枕と並つて討死とと三好の手いさし敗せけり
遠藤但馬守心へたけくとも敗軍と引立ち
と思こびも浮足とあうりける処と大須賀榊原一手
あうりてとと間あうをひ攻りてけるよと終
打まの散々とある本多彦次郎康重へ先刻より自
余ののの目もうけび大将秀次と討取んと隙と
うのひ居たりける折もあし三階菱よ五目結
と鎧の裾よとと間あう打て付たる武者一人侍五
六人引具しと落行あり康重とるりよと見付
御大将と見るの僻目う三好殿と見たり御返りあ

とと聲うげあう追行ゆと三段とうり追つ
絶さう秀次まこと危ふく見えあふ処土肥權左
衛門とて秀次の近習頭人ありける引返し本多
と切て掛る本多土肥とてこと睨と推參あり下
臆めとさうとと大音と叱と土肥戰場と上下
の差別あり武功と以て品と定むといひつと鎧と
以て突めとと本多も據あく鎧と合とてあつ
突つゆいして戦ふうち秀次の希有ありて虎口
とのうと落延たり康重の手と取敵と遁して氣
をいしち權左衛門と突伏んと踏込競ひめ
と權左衛門の鎧と切折たり權左衛門の鎧と切折

あつといひとく太刀と抜て切りり本多の肩先
とあつと切されとも鎧の袖の冠の板とさ
えらして身とあつと本多ひらりと身とく
拂切と切付と權左衛門の兜の真向あり胸板と
割付たり痛手ありとそのまゝ倒して音もをば本
多三好と討めととあり二陣と備へ堀久太
郎と目よりけと押もはる久太郎の後陣の関の聲
とあつとさうとや三州勢寄来りしと各持場と
あつとさうと定め備たての爰あるとと走
廻りて下知しける處へ田中久兵衛とて来り參
州勢の烈いさとのめと出ると半も聞ど久太郎田

大問己心編卷十三

二

中と吐く追うへ岩崎の北ある谷川と前より陣
と池田森と一同三好殿の陣敗軍をこの遠藤
長谷川も負軍たるとおぼゆるを左もあつて敵の定め
て勝よの追來るあつて長久手の原の
一段高さ処をこの引つて秀
政鉄炮大將を申ゆる遠藤の軍兵追々跡を慕て寄來
るへあつて鉄炮を打とありと十間より内より引
付てつるへあつて打つて馬武者一騎打たつて百石
の加増と申沙汰とへと下知するを堀り手の力の
のこつたら諸軍よとてこの引つて
重修真書太閤記九編卷之廿三終

重修真書太閤記九編卷之廿四

堀久太郎秀政遠三の勢と追返と事

并本多彦次郎武勇の事

去程よ三好孫七郎秀次のいふ十七歳軍小馴む
るばりの大勢と頼むと備定もあるとむと老功
の池田勝入齋先陣あり鬼といふと森武藏守と
とよ續たり又堀久太郎の秀吉の許と武邊者
なり三州勢何れと猛ともさすてのとあるやと
敵とあると打とけと兵糧つらひ馬の腹帯ゆる
め士卒と休息をゆて居ある處と見とすて水

野總兵衛尉忠重榊原小平太康政大須賀五郎左衛
門尉康高五千餘人と三手二分儀うの浪の寄る
如く鯨波作りうけ推寄しうの三好陣中大に騷さ
なら防さ戦えんとこれの帯ひろ解たり馬の腹帯
と結んとこれの鎧の上帯やと固く右往左往と奔
走し狼狽りさうあけこの名ある侍村善右衛門岡
本彦三郎白井備後守木下左衛門尉稻富喜内土肥
權左衛門尉あつ枕とあつて討死しける間と孫
七郎秀次漸本多彦次郎の窘しと切抜て樂田の
たぐ落む入長谷川藤五郎遠藤但馬守等さうも聞
えし重將あつとも事不意に起りしと以てこの

もこのれと切崩さし四方八面と敗走し先手へ逃
て池田陣へ馳加ふるもあり又ハ樂田とさしと
引退もありあつさうさうなり行とも堀久太郎秀
政さうりハをさしも騷りば參州勢の跡と慕えん
このゆゆと期したるさなり敵も敵さるさう
我等陣と三好殿と一つ列すのなまさうささ
て一戦のうらよ日頃の心掛とあつさへさあり
さのと驚くさうさうと谷川と前とあつ取鎮めと扣
なり鉄炮頭と味方敗軍と見ゆさなり參州勢只
今寄來るとも十間より外あらんよの玉とさう
さあつべうさう若あつと打たさうの曲事たる

こゝを甲首の侍より馬武者一人打得たりハ百石
の加増をとんと下知したまは何とも其意と得鎮り
めへりて居たる処よ三好陣の崩とてさけける折
共崩とて崩とてさうさうの五騎七騎つゝさうさう
けくれめの凡千四五百もあるへ堀り備と目あ
てよ逃入けるを追りけり岡部彌次郎丹羽勘次郎
つく追も逃さると救ささめさうさう追來るその跡
あり榊原小平太水野總兵衛大音よそれ見えし
備へ堀久太郎と見えはるど長追してはあしめさ
ぬへあやまちをると呼れとも岡部彌次郎丹
羽勘次郎と追うあしめさうさう更よ止るけりさ

堀久太郎へあしめを見て自眞先よ進み參州勢
我陣前近く凡十二三間とあやえし時とれ打と下
知しはる心得ゆといふさうさうさうさうさう
つて六七十挺つとるさうさう放ちうけは死生
へ知と二三十人をさうさうと打倒されたり勝りとの
たる岡部丹羽も思ひより福の仰天とてさうさう白け
見えける処とあやえし打立さうさう進ともさう
び退もをばたちとさうさうさうさうさうさう
音あ軍の味方の勝あるぞをさうさうと自身鎧
と取てくを出せし堀り家人よ奥田三左衛門尉お
ひさし繼りて駈たさうさう我とらさうさうと五百餘騎お

のてもふく切て入豎横十文字ノ突て廻との今
まて鬼ノ人りとおちたを三州勢秀政一人ノ
切立らば亂と立て一支も支得右と左へ散々み
逸失たり岡部彌次郎大の眼と活と見開さのうか
まの左様ノ振舞を軍のあひあるとこの勝ある
とこの負あるとあひのうけとあひとあひの味
方の勝とあひのうけと返し合をく死や死と士卒と
このひまの鎗と以て左と拂ひ右と突て戦ふありさ
まほとよ一騎當千と見えたり丹羽勘次郎とよ續
さそ働けの堀り先鋒と切うへさして六七段を
めり追却たり堀り侍とやうりあの人と打落

をと鉄炮の者ノ下知して打とらうの畑の黒こ
つあよりと進くと玉のあゝ岡部と丹羽の手も負
ひあわく進くととさける堀久太郎とさう見
てのと鉄炮のののと呼上あの人二人のうと猛く
働くと何とこの事うあらんあゝ勇士と鉄炮
まて打といふの情あゝ鎗と向へと下知しけと
ハ承らういといふまゝ堀り侍十七八人穂先と
そろへて突くとと岡部丹羽もととをば拂ひの
けのけ突ての開き開き又突崩し三州流の秘
術とたくし多くの敵と扣さ合ふとのさやあとも
猛うりけるよ久太郎ととを褒てあつくれ誠の侍

や是と聞々討捕んとするも情あり合戦の公軍なり
私の意趣あるよあつて引の侍ともと下知をれい
何とも鎗と引て備と立る折も水野總兵衛神原
小平太り先鋒の侍三四十人鉄炮足輕二百をりり
引具して丹羽と岡部は入りたるそのさよまこと
凛々たる勢ありと拂て見えたり堀り手より奥
田三左衛門馬ととめあつて敵や參州勢の心も
剛も身も健なり是と悉く討んとを味方も多く
討つへ如何も三州勢と池田の手へ廻さ
とやと思ひし久太郎の旗本へ駈入て軍と持
の池田あり當手の正しく檢使あり檢使の軍あり

の大う仕負たり此新参の參州勢と先陣のうと
へあつてむひて戦とあつて存ひのりと思召
ひやといひけし堀も元より其心なり早七の手
立よとさんとて人数とやとめんとなりける処
大須賀五郎左衛門尉康高本多彦次郎康重とこ
後とて寄ける岡部丹羽の戦とあつて難義よか
る神原水野とと堀り手は喰付て手あひく軍を
る体と見て関ともつくらぬ旗とあつて畦道傳ひ堀
り陣のうしろへ廻りし十二三間となりし頃鯨
波の聲ととつと場無二無三と突掛りしとよさ
しこの堀も大い勢と前後し引りて手痛く防

戦いたるつどとも神原と水野の大須賀本多う加
勢よいよく力と増あめと叫んて切結ふ大方の鏑
音天地と響うし流るる血の杵とも漂るるつど
堀り侍ともいつよりして六人の人々で切あひけ
んと心えりつりいこのやとも丹羽の此よりこの案
内者あり岡部も近頃所領と得つどへ便宜より地
下人ともあつりし走廻り堀り陣のめいりし
て竹筒と吹立編木ととり折節鯨波の聲と擧げ
あを堀り馬ともそをくたち何とひりこをさげ
いとてよ秀政の旗本もく亂とひんとあしける
ら本多彦次郎康重只一人鹿毛の馬の太くたくま

しとよ打のり十文字の鎗とあつくと打あつて突
て入その疾と雷光さうさうとあつて馬へ鳴立
の名馬あり乗人の無双の達者あり奥田三左衛門
う手の者さうり来り本多殿と見奉るまるとよ目さ
しとあつりしまののりかひて御首賜らりて堀久
太郎秀政う軍したる支證と仕らるやといひつ
三尺さうり大身鎗さし付との彦次郎うらうと打
笑ひ其方へ堀り侍り奇特なり冥途の案内仕とと
叫ひもあえび突るる鎗と鎗との戦ひの側の人
目と驚る彦次郎三ヶ處さうり薄手と負あう
やつと一聲さげふりと見ると奥田う侍の持たる

本多彦次郎康重

長身の鎗と打あつたされ太刀とぬうんとをる処と
たゞ一鎗と突伏扇ひついで打つうひをそく息
継あつりけり堀り侍とも此体を見てあまひや
と左右の切うらる折しも水野總兵衛忠重榊原
小平太康政本多うらひをふ續ゆくと旗とをくめ
て競ひうらる秀政う兵士ともめてあま盛り
つとつと術もななく池田陣よこを入て一息つり
んと突拂ひ突るうひ引退さなうら見あくは猪
の腰原の辰己より金の扇と紅の日出したる馬印
朝日よつりそひさうめと渡りて見えけり堀り
兵士いひく驚さつとる濱松の御出馬と見えたる

そやうして御勢も多うるへ荒手の大軍み取
攻らばあひゆきと大事あるへいりみとへと
と狼狽とるを見て堀り家人奥田三九衛門味方と
さうまぬと濱松の御勢と横見あうら龍泉寺山
のあつこへ引退く
甫庵本み平野權平長泰樂田より秀次の陣見廻
とつて來り敵と討て秀次とのけりことと載りて
堀久太郎三州勢と一里をうり追討よりちて首
二百八十餘打とりと注を合を見へ
濱松より御床机と立ち首とも實檢より海
ける處へ先手と進み池田森の兩人一手とあり

後陣の味方の敗北と救ふんと押来る由と注進の
 程もあつて浮線蝶の旗廿餘流鶴の丸の旗十流
 西へつとつひささるる御覽して奥平九八郎松
 平主殿助も切うり味方今朝より戦ひたるの
 のと助けいへと仰らる又井伊万千代安藤彦四郎
 その外究竟のの撰ひ御軍法と示され御旗本よ
 てい池田り陣の後と絶んと備えさを給ひよさ
 別本家忠日記より長久手の一番首は白井備後守
 頸水野藤十郎勝成討之とあり米津梅之助ハ
 鎗脇と助け鉄炮も中とも猶進て軍功を立と
 云本多康重苦戦して疵七処と蒙るといふ

森武藏守長一奥平九八郎信昌と合戦の事

并池田丹後守機變とさうる事

遠参の勇士岡部丹羽の二人堀り先鋒となつてひ
 蹴ある頃水野總兵衛榊原小平太ふと援けとの
 れの死力と盡して奔走堀り手ののの軍をこふ
 ふ難義あるへく見え一処へ本多彦次郎康重只一
 人うけ入死のの狂ひは狂ふれさすのの堀久太郎秀
 政此陣と引くやとあひとあつくとあつらふと
 見そり大須賀五郎左衛門等前後左右と取切
 上方勢一人ものこさ討取るとあめと叫んで
 追掛つての堀り手ののの思ひの外は打負岩崎の

方へ逃たり中ふも池田勝入齋父子と森武藏守と
ハその間二町と隔て陣と取て居たりけ
る処へ遠藤但馬守長谷川藤五郎が手の者追立ち
逃來りて參州勢の猛くこと語り汗をか
めし恐怖と森武藏守池田入道聞りも大
に驚きたら見らる一休とて逃來り我々前とも
憚りて大九様のことと申事と心得參州武士と
て三面六臂あるもあつて正しく父母も受たる
肉身あり射たるハ矢も立あらん切ハ何の切さ
らん已等ハ弓矢のぬり太刀や鎗とハ何の為
持たるどと恥しめらしていつても手のちなく

なくはめて居たりけさう折しも遙と関
作る聲の聞ゆるさう三州勢の寄るあ
ん備と立あて敵と待敗軍のの共の氣と援け
ふゆといふるところとあは旗の手とあつて弓とを
とめ鉄炮と先立との間と鎗とをとりて待とあ
へ參州勢へ逃れ追て先と争ひて來る森武藏
守のを見て過るる羽黒の八幡林と追立
らして恥辱を今日ひ晴めと面もあつて
參州勢と切てうる其勢のさげと誠と以て譬
と取てそののさ輪室の山と崩を勢もりや
らんとおびたど競ひうる三州勢武藏守と

まくりたてらば一支も支え得る四方へさうのと逃
くする武藏守のいさこちちちをあるまらぬ参州
武士の集り勢見苦く有様やりのまをとり追
て見ると武藏守鞍うさ立上りめくめくと
下知しつゝ雷光石火のこけしと戦ひ三州勢ふ
たくひ追あひげと鎗とて甲と落して引退く
櫻井次郎四郎り三面の兎もあつた戦ふ失しとや
武藏守まもく進んで逃すと追ける処へ奥平九八
郎信昌松平主殿助家忠山の脇と廻り來り武藏守
よ切てめくる武藏守もまもつたのひうけぬ事か
め先のめのととも逃足るゆくて手ふ足は是れを

さう一日よ手合とて奥平あり願ふ処の幸もと渚
とひさび大浪の寄つとて五六百騎馬の頭とを
ろくく馳うとて奥平九八郎是れ聞ふる森武藏
守鶴の丸の旗おしたたり鞍うさ立上り士卒
と下知する大将の武藏守もあつたさなり自余
のめつめ目とくくさか大将打てとてと大音よ
呼ぶれ奥平う手のめつ先日羽黒もて打め
つらる今日へ遁さしと攻う森ハ羽黒の恥
辱と今日雪めんと左右よ立し勇士とてめよ奥平
う旗本と志し猪の荒し如く切てめくると奥平
め馬廻りの侍とも一同よ我等う手並ハ羽黒もて

見たるらん然るるふくひ當手ふりふとみ
へ不義の軍ふ従ふと恥て命と棄ん為あるり殊勝
言うふ其義あつた武藏守長一大ふ怒り悪き雜
より早く馬と進めて駈たつるその間五六段ふか
うのほど武藏守莞尔と笑ひ三尺五寸の太刀拔り
さし奥平と只一打と切りける奥平九八郎はりく
と見るとより暴席馮河のあるまひの大將軍のをぬ
こと然らう加様は手近ふなりつとハ斯打拂ふ
ののけりと大身の鎗と以てひた突ははた立たり
森ハ名譽の強將とて鬼武藏守ともふはとてり奥

平ハ信長公ハ武者之助と名付らるる勇士ありと
とハいつのときありと砂畑と立て戦ふ有さよと
よめさよと覺えてり也ハ双方の郎等と
も折るさなりと押合ふると森と奥平と互は隔
てりとの別のとある処へ遠州の住人野澤外記
左衛門と名乗武藏守ふ突てり武藏ふりり
つりゆことや已も鎗と取り加様は突めのと心よ
覺えて生替と嘲ひつと突めると忽野澤ハ突伏
らと起上んとする處と森ハ郎等と寄あはる
て首と取たりけり森ハ郎等岡村十左衛門奥平と
討んと進みけり九八郎弓手とのり寄て二

刀さしつゝ首とりて落せしめて森う手敗しけ
るより敗軍の雑兵池田う陣へ逃來り味方勝軍
しつゝ奥平も切よくらと森殿も散々
打あさるゝ追付此へも奥平とらめ三州遠州
の軍兵とも駈向ふて御用心然とてと申ふ
るう池田入道牙とて云甲斐あさめの軍の仕
様へのつも左様あるを奥平もあはれ榊原もあ
ととやうとて我等う手柄のむとて見をん誰
誰の前へ進め誰々の左右とて手配りして待
さるゝ搦津國の源氏池田勝入齋の辛頃の
武運の驗といふと松平主殿助家忠へ奥平と

援らんと池田う陣も切りける池田勢の大將も
けりさし切とも更し引るを打ともちとも退も
と命へ今日ぞ限りかり名へ万代と傳ふるもの
あをきり付く戦ふると主殿助り勢あつたさ
つと引退く勝入齋をへ勝たるをあらとめめやつ
そののともと立上りく下知をて誰うハ一足も
あつた鐘長刀の穂とそろへ大太刀とぬさ連
葛直もあつて遠州三州の諸侍是へ池田勝入
齋名高き侍大将あり我打取んと踏止り息とも繼
さび切合たり爰へ池田丹後守輝重へ彼群鳥の兆
とあやし居たる処へ田中久兵衛り注進ありけ

どい是るを味方敗軍のことなりと備とく
古新輝政と大将といひ眞丸よりて待あり急
度思案しむる此軍元來宰相秀吉卿の意は非
入道との負腹立ての結構あり然るより味
方崩とたらし敗軍よ及ぶさて何の顔と以て樂
田よ至り秀吉卿と面と合をへる入道とのへ定
めて討死と思切ありんよりよもよと古新
殿と守立て池田の家名と起をへる計策あり肝要
なりと心付しむ當時少ある智者と云つべし勝入
齋へ元より氣短し思慮深りぬ大将なり奥平松
平の両勢よりけ合を一足も引くと進みぬへ相

從侍より伊木片桐と先として梶浦兵七郎渡邊
靱負河合又左衛門荒尾四郎右衛門牧野新九郎土
肥七郎右衛門以下いづれもく得りものと提げ渦巻た
る大勢の中へ面もあはれ切て入と遠州三州の侍
大将水野惣兵衛大須賀五郎左衛門榊原小平太三
ヶ所よ分して攻立る森武藏守へ奥平九八郎松平
主殿助丹羽勘次と向て追つるへり合たり
いづれも名とれし命とせし士あり勝負の
つとこといふこと知ると本多彦次郎岡部彌次郎水野
藤十郎といふことしつていつう又武功と立る時わ
らんと秘術と盡して戦ふると森も池田も今日

